

ベースラインの算定根拠（BA 評価）に関する資料

本申請では、2018 年 3 月に撮影されたグーグルアースの画像を元に BA 評価を実施した。

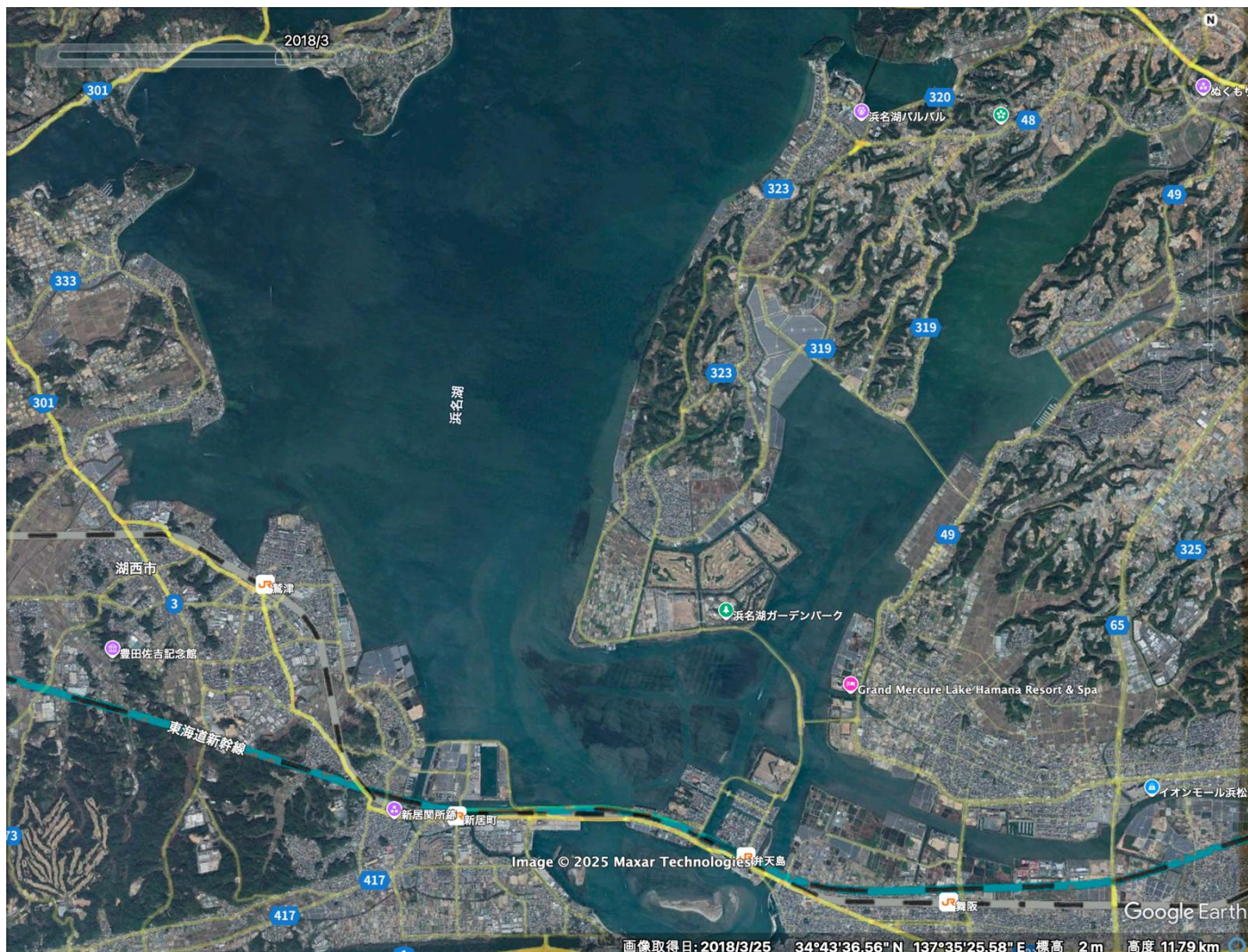


図1 2018 年 3 月当時のグーグルアースの画像（上）とその拡大画像（下）

本申請区域のうち、村櫛西（村櫛または村櫛水路前と記載）、館山寺地区（内山南と記載）になんらかの影が認められた。大瀬地区にも影が認められるが、本申請区域とは場所が異なっていた。

2018 年 3 月に撮影されたグーグルアースの画像と 2025 年アマモ計測ラインの重ね合わせ画像を作成した

(図2)。上述のように、2018年3月に撮影されたグーグルアースの画像には、「村櫛水路前」と「内山南」に何らかの影が認められ、この2エリアは、2025年に計測した範囲と重なっていることが確認された。「大瀬地区」は明確に活動範囲から外れているため、判定範囲から除外した。



図2 ベースラインとする2018年の航空写真と2025年のアマモ計測ラインとの重ね合わせ画像

「内山南」は、「館山寺地区」の計測ラインの一部と、「村櫛水路前」は「村櫛西地区」の計測ラインの一部と一致していた。

村櫛西地区について

まず「村櫛水路前」と重なっている範囲の「村櫛西地区」の湖底画像を確認した。図3から2018年の「村櫛水路前」と重なっている範囲には、2025年時点ではアマモが繁茂していた。沖寄りの場所でもアマモが再生していることが確認できた。

一方、水中画像はないが、2018年当時の観察・証言から、アマモが2017～2018年頃に消滅し、それに代わりにコアマモが繁茂するようになった状態であると推測された。過去の航空写真、現地観察記録および長年当該海域で操業してきた漁業者からの聞き取り結果を総合すると、当該海域におけるコアマモは、過去においても局所的・断続的に出現していたものの、広範囲に優占する植生ではなかったと考えられた。

現在確認されている当該地区のコアマモについても、分布面積は限定的であり、長期的に安定した群落を形成していたとは評価できない。また、図4に示したように、2025年時点では、岸寄りの浅い場所がコアマモの群落となっている。以上を総合的に考察し、2018年のグーグルアースに映っている影はコアマモの影と判断した。



図3 2018年「村櫛用水路」の影の位置（左）と同じ地点の2025年のアマモが繁茂している湖底画像（右）



図4 2025年6月の村櫛西地域の画像

オレンジ色の線より岸側の部分はコアマモが繁茂しており（左）、観察者によりコアマモであることが証言されている（右）。

館山寺地区について

次に「内山南」と重なっている範囲の「館山寺地区」の湖底画像を確認した。図5から2018年の「内山南」と重なっている範囲には、2025年時点ではアマモが繁茂していることが分かった。この範囲はアマモ再生活動前には図6のような紅藻類しか存在しなかったことが水中画像で確認されている。当該海域における紅藻類は、過去においても断続的に出現していたものの、広範囲に優占する植生ではなかったと考える。

現在も紅藻類の分布面積は限定的であり、長期的に安定した群落を形成していたとは評価できない。よって、2018年のグーグルアースに映っている影も紅藻類であると判断され、アマモの再生活動によって、アマモが繁茂したと判断された。

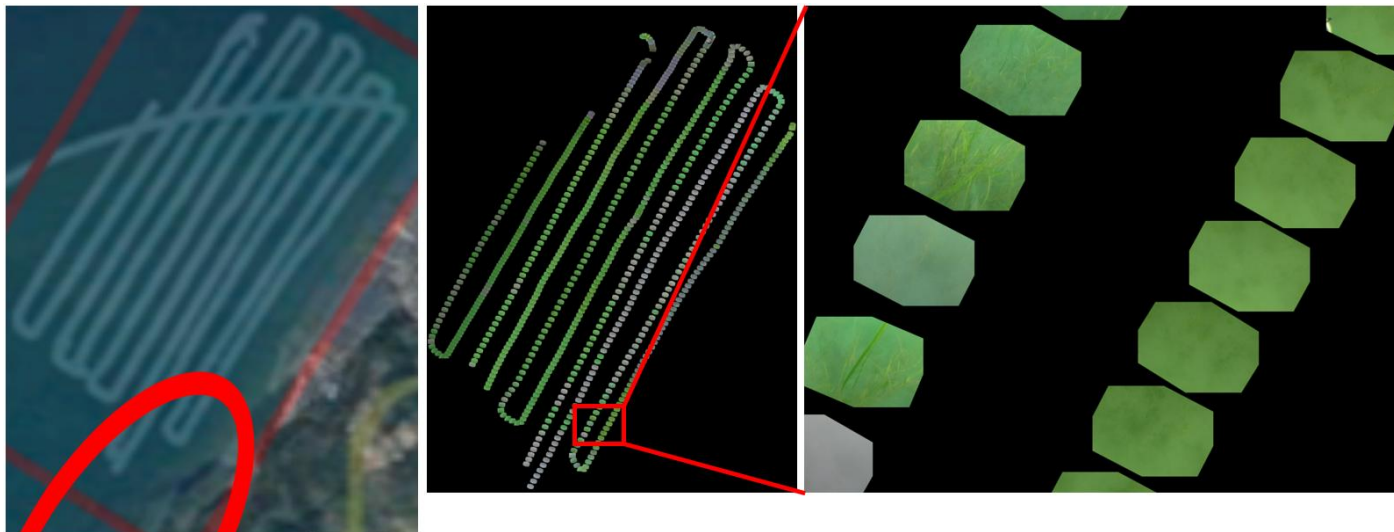


図5 2018年「内山南」の影の位置（左）と同じ地点の2025年のアマモが繁茂している湖底画像（右）

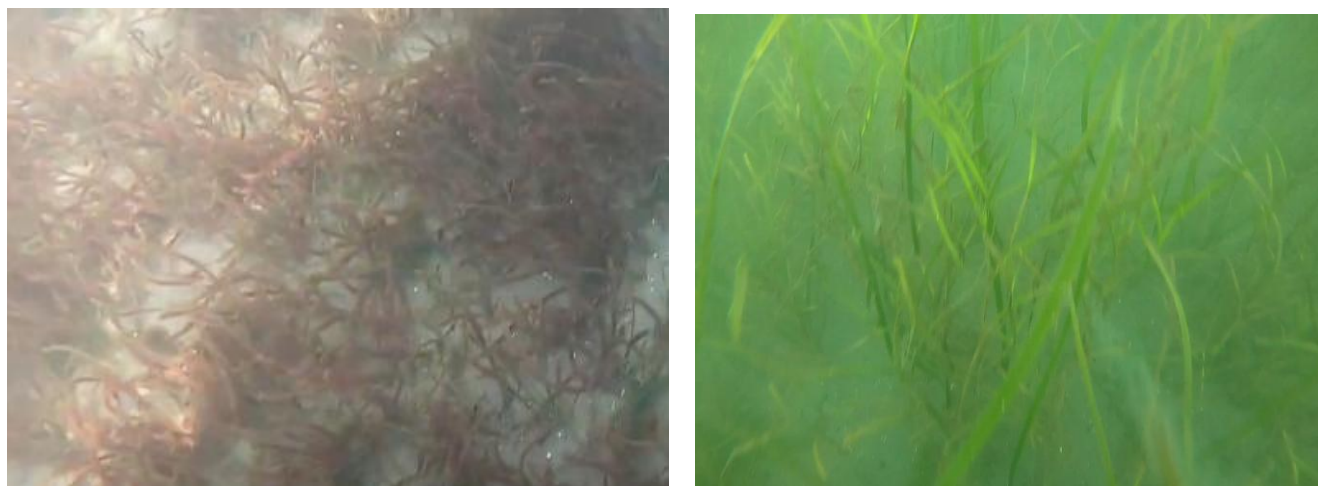


図6 活動前の「内山南」は紅藻類が繁茂（左）、活動後の「内山南」はアマモが繁茂（右）

BA 評価によるベースライン算定結果

以上のことから、2018年3月時点においてアマモは生育していないと考えられたため、BAによるベースライン評価を0とした。本プロジェクトにおけるCO₂吸収量算定においては、コアマモおよび紅藻類の植生を独立した吸収源としてベースラインから定量的に差し引く必要性は低いと判断した。

なお、今後も継続的なモニタリングを実施し、植生構成に顕著な変化が認められた場合には、必要に応じて算定条件の見直しを行う予定である。